

# 課題曲の中の課題 2011

## 櫛田 朕之扶

課題曲の提出の仕方が、ほぼ定着したと見れば良いのでしょうか。今年も、マーチが2曲とマーチ以外の曲が3曲、全日本吹奏楽コンクールの課題曲になりました。

まず、2曲のマーチですが、昨年と同じように、違ったスタイルの2曲が提出されました。

4分の2で書かれた『マーチ「ライヴリー アヴェニュー」』は、動機の執拗な繰り返しや歯切れの良いリズム設定から言って、「行進曲」という形式を確保した、行進曲らしい行進曲です。内容は、表題のように、爽快な・洒落た・ジャズっぽいコード設定から、ジャズやポピュラー・ミュージック的なコード進行の設定になっていて、1950・60年代のミュージカルの幕開けを楽しんでいるような曲となっています。

もう一方の『南風のマーチ』は、もうこの言葉を何回も使ってきましたが、いわゆる課題曲マーチです。テンポやリズムは行進曲として設定されていますが、内容的には歩くマーチというよりはコンサート・マーチでしょう。一種のムード音楽か、ポピュラー音楽と考えれば良いと思います。内容は、「春が来た」という季節や自然に対する気持ちを描いたもので、これもいつも言っていますように日記のような「私音楽」です。

マーチ以外の曲では、性格・形式・手法の全く違った3つの作品が取り上げられています。

『天国の島』は、日本人的な感性が、脱都会的な方向から描かれた作品です。伝統的な日本音階を上手く組み立てた部分と、西欧音楽的に処理した部分とで、作曲されています。総じて日本音楽です。

『シャコンヌ S』は、「シャコンヌ」という古典的な形式に、和声の組み立て方や、テンションを加える、といった方法を用いて現代的色彩をほどこした作品です。プロの作曲家の手によるもので、必要十分条件の備わった、隙がない曲となっています。音楽の基礎をしっかり学習するための、良い教材でもあります。

『「薔薇戦争」より戦場にて』は、シェークスピアの戯曲からインスピレーションされた曲、との解説が作曲者によって書かれています。戯曲の付帯音楽でもないようですので、色々な場面・登場人物・葛藤などを、演奏する側も自由にイメージすれば良いと思います。ただ、あの「薔薇戦争」のドロドロとした人間模様や複雑なストーリーのどこを捉え、描けば良いのか、また、戦場といってもどの場面なのかをイメージするのは、大変苦勞します。これだけの長さの曲において、壮大なドラマを皆さんの表現力で…と言われても、それはちょっとゴメンナサイと言ってしまいたくなります。この曲は、「薔薇戦争」という大きな組曲があって、その中の「戦場」ということでしょうか。私なりに、は、「小規模の交響詩」と捉えることはできますが。



〈マーチ - A''・A'''〉【B】

カウンター・メロディが加わってきます。このカウンター・メロディは、このマーチの一つの特徴として、カウンター・メロディという以上に、第2 主題的要素を持っています。この部分において、このメロディが主題と言っても良いのではないのでしょうか。

〈マーチ - B〉【C】

本来ならここでサビが少々洒落っけを見せるのですが、この曲の場合、反対に主題マーチが洒落ていて、このサビはとても生真面目です。最後のドミナント・フレーズは、半音下降ベースラインで、格好良さを作り出しています。

〈マーチ - A'''・A''''〉【D】

【B】と同じく、Alto Clarinet・Tenor Saxophone・Trombone・Euphonium のカウンター・メロディが、第3主題として登場します。

**D**

〈Trio - A・A'〉【E】

4小節の導入句のあと（この導入句のベースラインには、これからの曲のイメージを感じられます）、Trioに入ります。

冒頭の8小節は、敬愛するデューク・エリントン・バンドのオープニング、B.ストレイホーンの『Take the "A" Train』じゃありませんか。さあ、「A列車」に乗ってどこへ行くのでしょうか。

まあ、そんなこと良いんです。洒落かパロディなんです。この曲のハシャギぶりやワクワク感からすると、OKです。ハーレムのジャズを楽しんで（ちょっとアブナイですが）、マッハッタンの北へ出るのでしょうか。「パリのアメリカ人」ならず「ニューヨークの日本人」でしょうか。

この部分の主旋律・コード進行は、ずっと最後まで変化なく、繰り返し続けられます。設定されているコードは、テンションの効いたジャズっぽいムードが漂って、カッコイイです。

〈Trio - A''・A'''〉【F】

メロディ・コードともにそのまま、【E】が繰り返されます。Flute・Oboe とミュートした Trumpet の、いわゆるオカズは、良い意味の遊び感覚で演奏してみましょう。

〈Trio - B /サビというか、挿入句・エピソード〉【G】

イントロダクションのリズム・ファクターを使った挿入句です。最初の8小節はトニックのペダル・ポイント (Bb)、次の8小節はドミナントのペダル・ポイント (F) を使っています。最後の4小節のドミナント・フレーズは、rit.してなかなか良いですね。

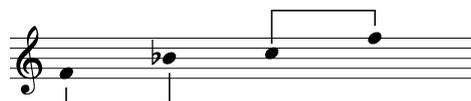
〈Trio - A'''・A''''〉【H】

ミュージカルの大団円を迎える部分です。シンプルに描かれた人々の賑わいは、演奏する側も聴衆の方々にも、幸せ感を運んで来ます。

## II 天国の島／佐藤博昭

この曲は、北海道北西部に浮かぶ、周囲 12Km の小さな島「天売島（てうりとう）」での印象を描いた作品だそうです。この島は、JR 留萌駅から車で 1 時間、さらに羽幌港から高速船で 1 時間のところにあり、オロロン鳥など海鳥の繁殖地として、国立公園に指定されています。表題の「天国」は、都会の雑踏や騒音・ストレス…などが微塵も存在しない、そんな天国のようなという意味でしょうか。海に囲まれた豊かな・静かな自然の姿が、強烈な印象として、作曲者の心をずっと捉えているのでしょうか。その作曲者の懐かしむ心・暖かい想いが、十分に伝わってきます。この曲から、島から眺める風景の美しさをイメージすると、確かに一度は訪れてみたくくなります。島の風景は、インターネットの動画サイトで見ることも出来るので、絵画的な演奏表現は可能です。しかし、この曲の演奏で大切なことは、その美しい豊かな自然とともに生活する人の心、自然に対する愛情、といった内面を暖かく表現することではないでしょうか。

曲の核となるのは、最後を締めくくる和音を作り出す、2 つのテトラコルドです。



この 2 つのテトラコルドから作り出される日本音階と、西洋音楽の音階が上手く配置されて、構成されています。



各部分は、これらの音階をもとにした旋律によって、その部分のイメージが創り出されています。この曲の表現では、この旋律の流れ・繋がり・対位（ヨコの繋がり・抑揚など）が重要になってきます。つまり、各部分を構成する旋律の歌わせ方が大きなポイントになります。

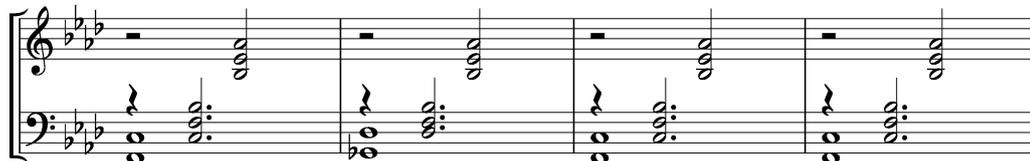
〈序奏〉曲頭から 9 小節目まで

Claves・Bongo と日本音階を積み重ねた響きの上に、日本音階（第 1 種《民謡音階》・第 2 種《都節音階》の混合型）を使った Piccolo の即興的な旋律で幕が上がります。Claves は拍子木であり、Bongos は締太鼓をイメージしていると考えられます。Piccolo の表現は、拍にとらわれない十分に即興的なニュアンスが要求されます。



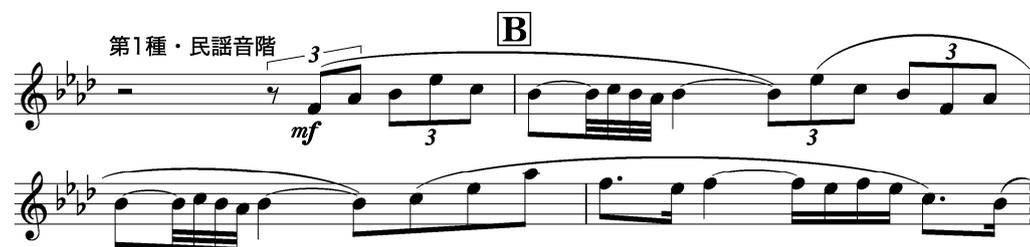
〈第1景〉 9・10小節目・【A】【B】

ブラスセクションが作り出す背景は、あくまでも静かに・深く・豊かに、生き物の生命を包み込んでいくようです。音楽的には、和声ではなく、和音による背景（梵鐘の響きにも聞こえます）とでも言うのでしょうか。



【A】の日本音階を奏でる旋律は、長閑な広がりを持ち、その旋律によって癒される時が流れます。2重奏は、楽器の組み合わせや奏者の表現によって、人それぞれの対話を醸し出していきます。

民謡音階による【B】は、島の人々の暖かなまなざしが、決して多くはないのですが、強く注がれているような、あくまでも平和な島の様子を再現しています。



〈第2景 1場〉 【C】【D】【E】

今日は島のお祭りなのでしょう、それとも豊作・豊漁を喜んでいるのでしょうか。自然とともに生きる息づかいが伝わってきます。断崖に迫る雄大な海は、人の生命を鼓舞します。

【C】では、細分化され、叩きこまれる生の勢いが感じられ、【D】と【E】では民謡的な（土俗的な）リズムに乗って、民俗的な旋律が力強く歌われます。この部分は、自然短音階で作られています。



和声は、和声法で書かれていますから、その進行にそって、和声が付けられた演奏が要求されます。

また、対位旋律が特徴的な色彩感を持っていますから、この表現にも留意されるべきです。

38小節・カウンターメロディ

〈第2景 2場〉【F】【G】

【F】では、人々を取り囲む自然の風景が感じられます。Saxophone セクションは緑の木々でしょうか。この連続する 7th コードは、和声法的な機能を持つものではなく、コードによって自然の音・動きを表現したものと捉えることができます。Clarinet セクションは、木々の間を抜ける風でしょうか。それとも小鳥達のさえずりでしょうか。Snare Drum の Rim ショットは、あくまで自然の木の音でしょう。

**F**

【G】に入って、少し風が強くなって来たようです。波も少し高くなって来たのでしょうか。しかし、鳥や木々・花々など、自然は優しいです。その中でやはり人々も、優しく絆を結びます。ここで奏でられる、自然と人々のともに生きる歌は、日本音階で作られています。

**G** 第1種・民謡音階

〈第3景〉【H】【I】

静かに夕陽が傾き始めました。静かに一日が終わります。都会では殆ど考えられないほどの豊かな自然に包まれた、天国のようなこの島にいる人々の、喜びの歌が聞こえてきます。【D】で出てきたこの曲の主要主題が、全合奏で高らかに歌い上げられます。その大らかな・豊かな・強い心を感じ、この曲の核音を鳴らし、この曲は終わります。

### Ⅲ シャコンヌ S / 新実徳英

「シャコンヌ」は、バロック時代（1600～1750）の器楽曲における、重要な形式の一つです。和声的パターン、グランド・ベースが繰り返されて、連続的に変奏される形式です。17世紀ごろにイベリア半島・イタリア半島で流行したという、歴史的背景があります。2拍目にアクセントを持った、ゆるやかな4分の3拍子で出来ています。

「シャコンヌ」と言えば、私たち吹奏楽関係者ですと、まずG.ホルストの名曲『吹奏楽のための第1組曲』の第1楽章を思い浮かべます。クラシックの名曲としては、J.S.バッハの『ヴァイオリン・パルティータ 第2番』、T.A.ヴィターリの『ヴァイオリンのためのシャコンヌ』、カール・ニールセンの『ピアノのためのシャコンヌ』を挙げる事が出来ます。また、パッサカリアと呼ばれる形式も、形式的には殆ど違いはなく、シャコンヌと同意語としても良いと考えています。パッサカリアとしては、ブラームスの『交響曲第4番』の第4楽章を挙げる事が出来ます。そして、あの兼田敏の『吹奏楽のパッサカリア』も忘れてはならない名作です。

『シャコンヌ S』は、この「シャコンヌ」の形式で作曲されています。形式がきちりと確立されていますから、旋律表現・和声・拍子感といった、音楽の基礎を学習するには、最適な教材です。一つ一つの変奏の中に課題も豊富ですので、コンクールで演奏するしないに関係なく、ぜひ一度は取り組んで下さい。作曲者のコメントでは「入門的楽曲」とありますが、これは、いわゆる初心者のメソードという意味ではなく、ある程度の表現技術がある上で、楽曲表現を学習して行くための入門という意味です。

#### 〈主題〉【1】

主旋律と和声が提示されます。旋律は、高い品格・気品を備えた、古典的で美しいものです。

主題

和声は、コードの形を変化させながら T（トニック）→S（サブドミナント）→D（ドミナント）→T を繰り返しています。

テンポは ♩=ca.76 と与えられていますが、少し速く、♩=ca.82 の *allegro moderato* といったテンポ設定でも構わないと考えています。このテンポの入りは、テンポ感を確立するために極めて重要ですので、3 拍の確実な予備が要ると思います。

〈第1変奏〉【2】

旋律を少し変化させた、優しい変奏です。和声は、コードの構成音の積み重ねを変え、テンションを加えることで、現代曲としての形を見せてきます。Vibraphone と一体になった Horn の和声は、この変奏の背景をしっかり創り出します。

〈第2変奏〉【3】

旋律を高音域に移行させながらの変奏です。和声にはドミナント・イ音の、ペダル・ポイントが加わります。次の変奏まで続く、Snare Drum と Bass Clarinet と Baritone Saxophone と Euphonium の動きは、特徴的な一つの響きを作り出しています。

〈第3変奏〉【4】

旋律・和声の要素が拡大され、色彩感の豊かな変奏になってきます。通奏される A・Gis 音 (Flute 1) と A 音 (Flute 2) の絡みは、美しい短 2 度の響きを奏でます。

Clarinet と Saxophone の旋律的に動くアルペジオが、この変奏の中心となります。金管中低音の楽器が、2 拍目の音を少し強くしたニュアンスを作ります。

## 〈第4変奏〉【5】

全合奏によるダイナミックな変奏です。旋律的に動く、コードのトップノート（Saxophone セクション）がこの部分の核になります。

## 〈第5変奏〉【6】

半音階的に下降する旋律・コード進行による変奏です。

## 〈第6変奏〉【7】

主題がト短調に転調され、前半が終わります。

## 〈挿入句〉【8】

各和音は、和声的な進行ではなく、響き中心の表現になります。和音の動きとベースラインの動きが、鮮明に対比されていることが重要です。

## 〈第7変奏〉【9】

セカンダリー・ドミナント 7th を伴いながら、全音階的に移行する和声変奏です。旋律・和声・ベースライン全てが解り易く、各 D→T を確実に表現しましょう。

〈第8変奏〉【10】

終曲としての圧倒的な華やかさが要求される入りです。テンポ設定も上げて（少し rit. しておいて入ると良いでしょう）、緊迫感を作ります。ここでは、和声は半音階的に進行し、現代曲としての色彩感をより加えていきます。

The musical score for measures 10-13 is written for four parts: Piccolo (Picc.), Trumpet (Trp. Cl.), Saxophone (Sax.), and Clarinet 2 (Cl.2). The key signature has one flat (B-flat major/D minor) and the time signature is 3/4. Measure 10 starts with a Piccolo melodic line consisting of eighth-note triplets. The Saxophone and Clarinet 2 parts play chords. The Piccolo part continues with similar triplet patterns in measures 11 and 12, while the Saxophone and Clarinet parts continue with harmonic accompaniment. Measure 13 concludes the variation with a final chord in the Saxophone and Clarinet parts.

〈主題再現部〉【11】

最高音にドミナントのペダル・ポイントを伴って、曲の終わりを惜しむかのような再現部になっています。

〈コーダ〉【12】

最後に、ドミナント・コードの代理コードを設定し、現代曲としての確認を求め、曲を閉じます。

## IV 南風のマーチ／渡口公康

「春の訪れを告げる風」というイメージで、春を迎える色々な情感を持って、作曲されたようです。季節・自然とともに生きるという、日本人の持つ季節・自然に対する情感を描くという感性を、この曲の作曲者のような若い方々がしっかりと持っておられることに、嬉しくなってきます。題名は、英訳の「Spring Breath」の方が良いですね。「南風」（季語としては《夏》です）、と言ったばかりに、イメージが遠廻りします。「春風に乗って」で良かったと思いますが、いずれにしても、この曲のキーワードは「春風」です。

曲のスタイルとしては、行進するという本来のマーチではなく、課題曲マーチと呼んでいるコンサート・スタイルのマーチです。ですから、行進曲という形式にとらわれることなく、普通に表現すれば良いと思います。内容はそう考え込むこともないでしょうし、フレーズやコード進行（セカンダリー・7th、two-five を使った、pops 感覚のコード設定）は、ともにオーソドックスですし、とくに個性的であるということはありません。だけど美しく、優しいし、暖かです。気持ち良く、音楽的な基礎の勉強ができますね。ビート中心の音楽や、わけのわからない響きだけの音楽が氾濫するなかで、この音楽は貴重です。演奏する側から言えば、何か個性・キャラクターを注入できないものか、みたいなことは湧いてきます。

### 〈イントロダクション〉【A】

主調である変ロ長調のドミナント・フレーズを使っています。Trumpet・Trombone セクションはトップノートをしっかり捉えた形のコードを、木管群の駆け上がりは、拍の最初の音がコード音ですから、フレーズを大きく取ります。4 小節目のアーティキュレーションは徹底しましょう。



### 〈A〉【A】

4 小節の対話になっています。最初の 4 小節は、作曲者のいう「春の訪れを告げる風」でしょうか。4 小節目の 3 拍目まで大きくフレーズをとって、風の姿を表現しましょう。4 小節目の 4 拍目からは、その春風へのちょっとした思い・気持ち・語りかけでしょうか。

〈A'〉【B】

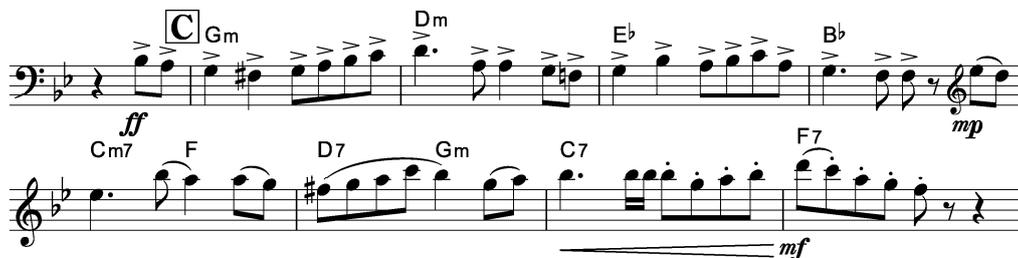
もう一度風が吹いてきます。鳥や花、陽の光、季節を運んで来ます。カウンター・メロディは何をイメージしましょうか。



〈B〉【C】

サビの部分ですね。春という全てが新しくなった季節、自然・生き物・人々は、何かしら力強く歩み始めます。旋律ラインのマルカート（アクセント）は、スタッカートにならないように、4分音符はしっかり音を保ちましょう。躍動感を持って、力強いブラスのノリを發揮します。

後半の4小節は、頬を撫でる春風の優しさを感じます。フレーズを豊かにふくらませて、スタッカートは、柔らかくとりましょう。



〈A''〉【D】

春を迎えました。全ての人々が、季節・自然の喜びを感じています。あくまでも、豊かな・暖かな・恵みを感じた表現であって欲しいです。活動的・活発な表現も良いのですが、決して力んだりしてはいけません。

〈第1 Trio〉【E】【F】【G】

形式通り完全4度転調して、Trioに入ります。前半のマーチの主題と同じような、リズム動機を持った旋律ラインです。この形は、次の第2 Trioでも引き継がれ、最後まで続きます。

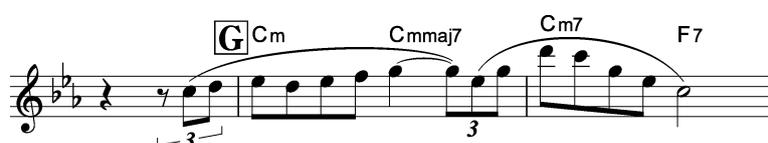


この部分全体では、アーティキュレーション・スラーをフレージング・スラーと間違わないようにして下さい。

【F】からは、修飾・カウンター気味に、Glockenspiel・Trumpet (con sord.) が入ってきます。お馴染みのスタイルですが、アクセサリはキラッと美しくないといけません。



【G】では、少しマーチとしては異質かも知れませんが（もともとそんなにマーチと考えていませんから大丈夫）、Flute のオシャレな挿入句がわざとらしく、フッフツという感じで、面白いですね。



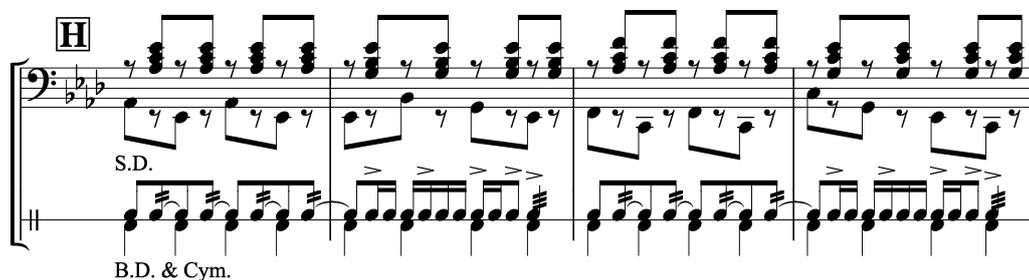
再び完全4度転調して、第2 Trio に入ります。

〈第2 Trio〉【H】【I】

主旋律は、前半のマーチ主題からずっと続くリズム動機をもとにした主題です。全合奏ですので、各部分の表現（4小節ごと）・セクション・パートを、イメージをより鮮明にし、バランス・強弱を充分に考えて表現しないと、全く単調に聞こえてしまいます。Trombone セクションのカウンター表現は、アーティキュレーションと共に、この部分の大きい課題です。



打楽器群・Horn・Bass のリズム（足音・鼓動…）も力強く、鮮明に聞こえて来なければなりません。



〈コーダ〉【J】【K】

主題のリズム動機とイントロダクションが重ねられて、爽やかに・気持ち良く・何へのこだわりもなく、終わります。

## V 「薔薇戦争より」戦場にて／山口哲人

現代音楽と呼ばれるジャンルに入る作品です。昨年の『吹奏楽のためのスケルツォ第2番《夏》』とは違った書法で作曲されています。この作品の方が、感覚的な音の流れ・響きを捉えて創り上げられていますので、昨年の作品から見ると、こちらの方が同じ現代音楽というジャンルに入るとしても古い書法と言えます。旋律にしても和声にしても、捉え易いのではないのでしょうか。昨今のヨーロッパ・アメリカの作品にもこのような書法の作品が多く見られ、コンクールでもよく取り上げられています。

テーマになっている「薔薇戦争」は、英国史上・王位継承を巡っての争いです。W.シェークスピアの戯曲「ヘンリー6世」3部作や「リチャード3世」の舞台にもなって、王位継承をめぐる人間模様・葛藤のドラマが見られます。そこには、人間の持つ内面の欲望・醜さ・卑劣さが、皮肉を込めて描かれています。この戯曲の付帯音楽として作曲した、という作曲者からの解説がありますが、その全容がこの曲ではないと思います。壮大なドラマをこれだけの曲で表現する、ということは不可能だと思います。「薔薇戦争」という組曲があって、その内の一曲だと思えます。

曲は大きく、1～25小節まで・26小節以降の2つに分かれて構成されていると考えられますが、1つの大きな前奏曲的なまとまりとして見ることも出来ます。

構成されているファクター・パーツは解り易いので、部分部分の構成はよく理解出来ると思います。前半では、3連符に続く和音が舞台を設定して行くのですが、和音の配置は、3和音・4度堆積和音を交互に配列したり、同時に鳴り響かせる、といった設定で創られています。調性の音楽のように、機能するわけではありません（ダイアトニック・コードからの脱却を図ったものですが）。あくまで、響きの創造を求めたものです。8分の12(8分の6)で動く Piccolo・Flute は、空気・炎・木の葉・光など、ある種の自然な揺れを感じさせるのでしょうか。登場人物を促す旋律ラインは音階的で、それほどものすごく想定外に飛躍するわけでもありません。むしろ、内面的な深層心理にでも向かっているようにも思います。

26小節目の【D】からの半音階で動く3+2・2+3のリズムには、4度堆積和音を伴って、より内面的に深く掘り下げられていく何かを感じます。【F】の直前で、1つのクライマックスが構成されます。トールボットの討死、敵の死を嘲笑していたジャンヌ・ダルクの命運も尽きて…。【F】から、セント・オールバンズでの、国王ヘンリー6世とヨーク公との前面对決へと進んで行くのでしょうか。【J】からの Maestoso は、ヨーク軍の勝利によるヘンリー家の滅亡、リチャードの野望、【K】は、このあと何が起こるのか誰も気づいてはいない…。そのようなところで、この曲は終わっているように思います。再びヘンリー7世が王として即位し、薔薇戦争が終結するまで、リチャード3世の野心と滅亡のドラマは展開するのですが…。

---

2011 年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲分析

## 課題曲の中の課題 2011

監修・著作：櫛田 肤之扶

編集・制作：株式会社ウィンズスコア

配布・公開日：2011 年 5 月 31 日

楽譜引用元：

堀田庸元・佐藤博昭・新実徳英・渡口公康・山口哲人

『2011 年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲』全日本吹奏楽連盟、2011 年 2 月 1 日発行

※本書の著作権保有者は、著作者である 櫛田 肤之扶 であり、櫛田 肤之扶 の協力・許諾のもと、  
(株) ウィンズスコアが本書を制作・公開しております。

※本書に掲載されている楽譜の一部は、『2011 年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲』からの引用  
であり、全日本吹奏楽コンクール課題曲の権利は、(社) 全日本吹奏楽連盟に帰属します。

※本書の配布・コピー等の利用については、本書の内容・目的を理解した上で、金銭の受け渡し  
が発生しない場合に限り許可いたします。

※本書を使用するの、第三者との紛争・トラブルが発生した場合、著作者・制作者、及び (社)  
全日本吹奏楽連盟は一切責任を負いません。